

III 紹 介 III

猿谷 要編『アメリカよ！』

澤 喜司郎

(I)

冷戦以降唯一の超大国であるアメリカ、世界の誰にとっても大きな影響力を持つアメリカの姿がイラク戦争を通して改めて浮き彫りにされ、その姿を見て、アメリカという国に対して深い関心を払わずにはいられないが、「今後も新聞やテレビ、または雑誌などで、アメリカについての情報があふれるように流されることが予想され」るため、「幅広いアメリカについての教養と、深い専門性に裏づけられた鋭い観察が、これから求められることになる」と編者は言う。

このため、アメリカに幅広い関心をもつ大学人や作家、ジャーナリストなど28名の多彩な執筆者が「イラク戦争時代の読者に対して、マスコミにはない核心に迫る見解を提示」したものが本書であり、編者は「この本がただ単に現状を解説するだけにとどまらず、アメリカという国の本質を見据え、合わせて世界の潮流を理解する」のに役立つであろうとしている。

本書の構成(執筆者陣)は

1. 「明白なる天命」、宗教国家アメリカ(片桐康宏/上杉忍/古矢旬)
2. アメリカは暴力的な「自由と民主主義の国」(高樹のぶ子/吉田健正/荒このみ/岩本裕子)
3. メディアと戦争(柴田寛二/常盤新平/廣淵升彦/栗原達男)
4. アメリカの二つの潮流、振り子は振り戻すか(砂田一郎/藤田文子/岩野一郎/有賀夏紀)
5. ネオコンの世界戦略(越智道雄/坪内隆彦)
6. 人種差別は今もある(吉田ルイ子/村上由見子/鈴木健次)
7. アメリカは衰退する(佐伯啓思/松尾式之/安岡真)
8. アメリカよ、大国らしくあれ(浅海保/芝生瑞和/煤孫勇夫/猿谷要)

であり、特別寄稿としてカリフォルニア在住の日系アメリカ人 Yuri Kochiyama の“Listen, America!”も収録されている。本稿では、Kochiyamaを除き、それぞれの

執筆者が展開するアメリカ観やアメリカ論を簡単に紹介したい。

(Ⅱ)

片桐康宏「21世紀版マニフェスト・デスティニー」は、「自由」の持つ価値が絶対的、普遍的なものではなく、相対化、可変的なものであり、その地域、国家、社会に固有の諸条件から徐々に醸成されていかなばならない事情があり得ることを、そして「押しつけ」の「自由」は究極的にはその「自由」を骨抜きにしてしまうことをアメリカは認識すべきだという。上杉忍「文明と野蛮」は、イラク戦争においてはいつの間にか大量破壊兵器やテロ支援の疑いは後方に退き、独裁者サダムの殺害と「自由と民主主義」の輸出がこの戦争の旗印となり、この論理は「野蛮を克服し文明を押し広げる」アメリカの「明白なる天命」の現代版であるとし、古矢旬「二つの自由」は万人にとっての絶対的自由などは存在しないし、自由をはかる客観的基準も存在しないにもかかわらず、対イラク戦争では独裁からの「自由」が絶対化され、戦争に反対するものを「自由」への敵対者と見なす政治的風潮が生み出されたとしている。

高樹のぶ子「アメリカは信用をなくした」は、イラク戦争で信用をなくしたアメリカについて行くのではなく、アメリカの座標軸に対抗する日本独自のアイデンティティーを形成すべきときであるといい、吉田健正「自由と民主主義の国のもうひとつの顔」はアメリカは武力信仰体質とでも呼ぶべきものをもち、武力国家的体質が政治と社会の底流を流れているため同時多発テロがなくても、ブッシュ政権は強大な軍事力にモノを言わせて世界をアメリカに都合のいいように作り替える行動に出たのではないだろうかとしている。荒このみ「アメリカン・ヴァンダリズム」は、アメリカ人が生涯に数十回引っ越しする行為はアメリカが他国を非難するときに好んで使うヴァンダリズム（野蛮や破壊行為）そのもので、それが物質主義で、アメリカ人はそのような精神構造を持つといい、岩本裕子「ボウリング・フォー・コロンバインの風景」は第75回アカデミー賞の長編ドキュメンタリー賞最優秀賞を受賞したマイケル・ムーア監督を通して銃社会アメリカとマス・メディアを批判し、マス・メディアは平和を訴えつつも巧妙に反戦論を避けようとしているという。

柴田寛二「メディアとイラク戦争」は、アメリカ社会は9・11同時多発テロ後ある種の脅迫観念に取り付かれ、並行して星条旗への帰属意識が大多数のアメリカ国民の言動を支配し、それは米メディアの幹部たちも例外ではなく、この傾向は冷静な国民が危惧する政権による情報操作・情報管理と表裏をなしているとしている。

常盤新平「謙虚な国」は、アメリカが謙虚であることを9・11事件によってブッシュ政権が忘れてしまったために終わりのない戦争が近づきつつあるという恐怖があるという。廣淵升彦「世界の民意を買い被るな」は、ヨーロッパなど世界の「民度」あるいは「民意」は決してアメリカ人が期待するほどには高くはなく、また有り余る自由を享受し、報道機関が熾烈な競争を繰り広げている先進国の中でベルリンの壁崩壊の意味を正しく理解せず、ソ連が70年も前に仕掛けた「コミンテルンの呪縛」から未だに抜けきれずに社会主義を美化し、曇りのない眼で物事を見ることのできない政治家や学者やマス・メディアがまだまだ淘汰されずに生き残っている日本のような時代離れした地域もあるという。栗原達男「アンタッチャブルの国なのか」は、アメリカは日本への原爆投下やベトナム戦争で人道を踏み越えた事実を猛省していないから「アンタッチャブル」が続行するように思うとしている。

(Ⅲ)

砂田一郎「帝国のデモクラシーに期待できるか」は、イラク戦争に関して私たちの認識とアメリカ人多数派の認識の間には大きな落差があり、アメリカのような強大な軍事力をもつデモクラシーの国で国民の多数派が海外侵略を支持したとき、それを阻止できるものはどこにも存在しないといい、藤田文子「国益と理念と偶然が交錯するアメリカ外交」は自らの理念及び理念を体現する体制に寄せる揺るぎない自信と、他国による拘束から自由でありたいという衝動に根ざす「単独外交主義」は建国以来の長い歴史をもち、イラクに対する軍事介入においてもその傾向が歴然とうかがわれ、アメリカの傲慢さの一因はアメリカが「自由」「平等」「民主主義」の理念を世界の中で最もよく体現している国だという自負にあるとしている。岩野一郎「アメリカ史の振り子は振り戻す」は、アメリカの持つ歴大な軍事力が「アメリカの正義」と結びついたとき本来はテロ組織からアメリカを守るはずであったものが「ならず者国家」の持つ大量破壊兵器や生物化学兵器を殲滅するための先制攻撃に用いられるようになるのは十分考えられるとし、有賀夏紀「文化戦争のなかの9月11日」はイラク戦争では第二次世界大戦時同様にアメリカ国民は見事な団結ぶりを示したが、第二次世界大戦時とは異なり、非アメリカ的なマイノリティの存在や反政府的ともいえる反戦運動を許容し、これは60年間における人種擁護の拡大と評価できるという。

越智道雄「新アメリカの世紀プロジェクト」は、ユダヤ系アメリカ人の知恵者たちは9・11同時多発テロを天佑神助と捉え、イラクを政体変革させて中東に「イス

ラエル十変革されたイラク」という二極の操作ボタンをアメリカにもたらす戦略を立案したといい、坪内隆彦「ネオコンを支えるキリスト教原理主義」はネオコンは社会的保守路線を採ることによってキリスト教原理主義勢力との関係を深め、また独裁という悪を倒し、世界に民主主義という善を拡大するというネオコンのスローガンはキリスト教原理主義者の使命感と善悪二元論に共鳴するとしている。

吉田ルイ子「GOOD BYE AMERIKA」は、ドル独裁専制国家 USA とつきあいたくないので、国連はスイスか日本に移すべきで、そうすればアメリカに遠慮せずに日本も真剣に世界の平和を追求できるとし、村上由見子「ハリウッド映画にみるアラブ人の表象」はハリウッド映画が描いてきたように世界は「我ら」と「彼ら」に単純に分けられないはずだといい、鈴木健次「6・11と日系アメリカ人」はアメリカの大勢がテロへの報復に流れた中で報復からの救済という動きが存在したことから、アメリカの民主主義の回復力に期待したいとしている。

(IV)

佐伯啓思「理念の共和国から力の帝国へ」は、アメリカの国益と世界の秩序が重なり合うとき自由・民主主義の理念を介してアメリカは世界と重なりあうが、それはアメリカの力もグローバルな世界構造に依存していることを意味し、そのことを忘れたときアメリカは帝国ローマと同様、しかも一層急速に衰退するという。松尾弑之「民衆はアメリカを打ち砕き」は、人々にとっては食べることの方が大事で、国家の理念や解放者の理念などは人生の阻害要因でしかなく、そのため余分な精神性は不毛の象徴であり、よって独裁者や解放者の区別なく人々はそびえる偶像をすべて破壊するとし、安岡真「アメリカよ世界をもっとありのままに」はアメリカを「劣等感の裏返しから自足せずにはおれぬ巨大なこども」と捉え、世界の混乱はひとつの文明で解決できるものではないので、アメリカが民主主義を標榜するなら、もう少しあるがままに世界を見るべきだとしている。

浅海保「今こそアメリカはソ連と違うことを示す時」は、大国とは所詮「相対主義」の持つ矛盾、辛さに耐えることを代償に大国ゆえの、しかも大国ゆえに大きい「利益」、さらには「誇り」を得るという構図があり、それが厳然たる事実であるとし、芝生瑞和「アメリカの驕りを告発する」は9・11同時多発テロによってブッシュ大統領がアメリカ国民に異常な「愛国心」を昂揚させ、この「愛国心」がアメリカ国民の目を曇らせているため「アメリカ国民よ、いいかげんに目を覚ませ」という。煤孫勇夫「超大国に求められる謙虚さ」は、アメリカのイラクへの武力行使は国連

を形骸化させる初めとなるかもしれないという意味で、もう少し国際協調が図れなかったかという思いは残るが、イラクのフセイン大統領の独裁恐怖政治にピリオドが打たれた意義は大きく、イラク戦争は「負の選択」であったかもしれないが、長い目で見るときには歴史家が「正の選択」だったと断じるかもしれないとし、猿谷要「アメリカよ美しく年をとれ」は「アメリカ人はなぜ自分の国だけが狙われるのか、よく分かっていない。なぜアメリカが多くの人々から憎悪の対象とされているのかをよく理解していない」がゆえに「反省を忘れて武力に走ることは、その国が理性を失って衰退への第一歩を踏み出したことを物語っている」としている。

(V)

以上、本書に収録されている各エッセイを簡単に紹介したが、極めて示唆に富む秀でたエッセイがある一方で、本稿では紹介したものの事実を誤認しているなど全く紹介に値しないエッセイもあり、また執筆者の同級会的な年齢の偏りも少し気になるが、概して言えば、9・11同時多発テロを他人事だと思っている日本人、経済発展によって傲慢になった日本人、プトレマイオス的な思考をする日本人、日本は被爆国で被害者だと思っている日本人、9・11同時多発テロで犠牲になった人々よりもイラク戦争で犠牲になったイラク人に同情する日本人には是非とも読んでいただきたい書物である。

(弘文堂, 平成15年, 231頁, 1,300円+税)